

総評 2020.10月分 杉本真維子

「全開にされた蛇口に近づくのさえ／怖い／水って三回唱える」

水への恐怖に、「mizu」という言霊の力で立ち向かおうとしているところに、原始的な手触りがあって惹かれました。恐怖感はそれを抱くことで生きづらくはなるかもしれませんが、創作には役立つこともあるのではないのでしょうか。

「少し開く金魚のえらに真の闇」

おそろしい闇が金魚のえらというじつに小さな場所に潜んでいる。そこにリアリティを感じます。観察眼が素晴らしいと思います。

「野を行けば／叢の蔭に／あのひとぶんの窪み」

「あのひと」はそこで何をしていたのでしょうか。謎めいていて面白く読みました。

そのほかの佳作は以下のとおりです。来月も投稿をお待ちしています。

「消灯のあとのうるさい静けさ」「断面を触り／そこから先の姿を当てる瞬間／焦る／熱くて」「鳩が飛ぶ 背中に透ける鎮魂歌」「知らない人が／知らない人からもらったという／柿をくれた／知ってるのは柿だけ」「求められてますかって聞いてみる／洗面器の水は／すこしだけ揺れた」「脱いだ服のぬくもりが／少しもったいない」